

報告

日本技術士会北海道本部 社会活動委員会(北海道スタンダード研究委員会)

教育の今と北海道の未来

～「ほっかいどう学」の目指すもの～

奈良 照一

1. はじめに

北海道スタンダード研究委員会(以下、当研究会)は、北海道に住む我々“北海道人”が、北海道らしさ・北海道人の考え方・気質など北海道そのものを探求し、その上で“北海道のあるべき姿”、“北海道の自立”、“北海道の役割”などについて幅広い分野で議論を交わしながら“北海道が元気になる”様々な提案を道内外に、そして未来に向けて発信していくことを目指し活動しております。

今回ご講演いただいた新保先生は、認定 NPO 法人ほっかいどう学推進フォーラムの理事長として、「ほっかいどう学」を通じて、北海道を愛し、北海道をよく知り、北海道を元気にし、北海道の未来を担う子供たちが輝き続けるための多様な人材育成に取り組まれています。この思いは、まさしく当研究会が目指すところと同じと言えます。

ご講演の前半は、なぜ小学校の先生だった自分が「ほっかいどう学」に取り組んでいるのか、そして、今、小中学校の現場で一体何が起きているのか、をご紹介いただいた後、後半では「ほっかいどう学」が目指していることや現在の活動状況等についてお話をいただきました。



図-1 新保先生

2. 講演会概要

講演：教育の今と北海道の未来

～「ほっかいどう学」の目指すもの～

講師：新保元康様(認定 NPO 法人ほっかいどう学推進フォーラム理事長)

日時：2022 年 4 月 18 日(月) 18:00～20:30

場所：TKP 札幌駅カンファレンスセンター
& オンライン(zoom)

参加者：21 名(会員会友：12 名、非会員：9 名)

3. 講演要旨

(1)なぜ「ほっかいどう学」か？

新保先生は、昭和 33 年小樽市生まれの現在 63 歳です。昭和 57 年に北海道教育大学札幌分校を卒業した後、札幌市の教員(以下、本稿では“教員”ではなく“先生”)となりました。ご専門は社会科とのことです。先生としての最後は札幌市立屯田小学校の校長先生で、令和元年 3 月をもって定年退職されたそうです。

先生時代の後半には、IT を活用した学校経営の研究等にも関わり、文部科学省の次世代学校支援モデル構築事業推進委員や北海道教育委員会の学校力向上に関する総合実践事業アドバイザー、文部科学省 ICT 活用教育アドバイザー等も歴任されています。

その新保先生が、なぜ「ほっかいどう学」に取り組まれたのか、を以下にご紹介します。

新保先生は、若い頃、小学校の先生として社会科を子供たちに教えていく際に、「下水」「暗渠」「ごみ」等の環境問題について、教科書に載っていないことも教えたいと考え、様々な工夫を凝らした授業をさ

れていたそうです。例えば、昔は下水がなく、井戸の汚染が問題になっていました。昭和 57 年頃とのことです。「ぼっとな便所(汲み取り式便所)はまだあるか？」をテーマとした課外授業を行い、子供たちと近所のご家庭に聞き取り調査をしたり、地域の除雪のことを調べるため、あいの里の 1 軒 1 軒の家を回って聞き取り調査をしたこともあったそうです。また、雪の学習では、「冬の間、虫はどうしている？」と子供たちと一緒に雪を掘って虫探しをし、冬眠中のカエルを見つけたことがあったそうです。当時はこうした課外授業を行いやすい時代だったとは言え、子供たちの眼にはとても魅力ある授業で、熱のある素敵な先生に映っていたことが容易に想像できます。

そうした中、総合的な学習の中に北海道の雪のことを教えられる教材がないことから、現在所属している(一社)北海道開発技術センターに相談し、そこで同センターの原理事と出会ったことが、今に至るきっかけとなったそうです。

2000 年には、ホームページが普及し始めの頃に「北海道雪たんけん館」という HP を制作し、ここでは、北海道らしい英語学習にも取り込まれました。北海道の子供たちが、北海道のことを英語で話せるように、例えば「雪がたくさん降る」、「雪合戦」、「ストーブ」を英語でなんて言うのか、などが学べるようにしたそうです。

新保先生の活動の原動力は、「北海道の子供たちがもっと北海道を学んで、自分たちの北海道を自分たちでつくってほしい」という思いです。

北海道の持つポテンシャルが今、世界から熱視線を浴びています。その魅力をもっと子供たちに知ってほしい。北海道の豊かな歴史について自信と誇りを持ち、もっともっと北海道のことを好きになってほしい。北海道標準(スタンダード)は日本の標準的なものさしでは測れない。そして、その魅力はそれを支えるインフラがあって成立していることも伝えたいとのことでした。

そこに教育の役割があり、教育こそ北海道の、ひいては我が国の最重要な政策であると熱い思いを込

めて話されていたことに感銘を受けました。

(2)「学校は今？」

「北海道のことを教える」ことに、教育現場である学校がもっと力を入れて取り組むべきではないか？と思われる方も多いかもかもしれません。

しかし、今の教育現場を取り巻く厳しい実情を新保先生からお聞きすると、先生たちがやりたくてもできない状況にあることがよくわかります。

先生は時間外労働の多い業種です。北海道新聞に『「休めない」先生悲鳴(H29.9.9)』という記事が掲載されたことがあります。

よく、「学校の先生は夏/冬休みがあるからいいね」と言われることもありますがこれは誤解です。“夏/冬休み”とは正式には“子供たちの夏/冬休み”、あくまでも先生にとっては通常勤務の期間です。夏/冬休みは先生たちも休んでいるイメージがあると思いますが、決してそうではないそうです。夏/冬休みなので、年休を取りやすいだけとのこと。昔はたしかに緩やかなこともあったようですが、今は厳しく管理されているそうです。

また、先生たちには残業手当がつきません。これは 1966 年調査で残業時間平均が一カ月で約 8 時間だったことが基準となり、本給の 4%が上乘せされる決まりとなって現在もそのまま踏襲されているためです。

先生たちの今の残業時間平均は大幅に増加(2006 年時点で一カ月で 34 時間)していますが、それでも当時定められた本給の 4%のままとのこと。さらに土日の部活動に出ても、3 時間以上でわずか 2700 円の日当しかつかないそうです。

日本の先生たちが大変な要因は何でしょうか？

諸外国の場合、先生は授業に特化していますが、日本の先生は授業だけをしているわけではありません。日本の先生は「知育＝教科指導等」に加え、「徳育＝道德等の生徒指導・特別活動等」、「体育＝部活動等」のすべてを行っています。これがいわゆる日本型教育です。日本で教育を受けた私たちは、このことを当たり前のように思っていました。新保先生のお話を聞くと、日本の先生たちの負荷が大きい

ことがよくわかります。

そして日本の教育の水準は高く、ゆとり教育で少し落ちましたが、安定的に世界のトップ水準を維持しているそうです(2018年調査：読解力11位、数学的リテラシー1位、科学的リテラシー2位)。

この日本型教育が諸外国から高い評価を受けており、「EDU-Port ニッポン(2017～)」として、エジプト等、広く海外にも輸出されているそうです。

金八先生を知らない方はいないと思います。32年間も続いたTVドラマで、今なお、日本人の心の底に深く広く残る先生像をつくりあげました。

新保先生は言います。

金八先生が授業している場面を思い出せる方はいらっしゃいますか？金八先生の授業のシーンは“人”という字は支え合っている姿であると黒板に書いているところくらいしか思い出せないのではないのでしょうか。金八先生の真骨頂は放課後の活躍で、まさしく日本の先生を象徴しています。

・・・という新保先生のお話を聞くと、先生たちに大変お世話になった自身の子供時代を思い出し、感謝に堪えません。

先生の負担が大きい実情から、教員への志願者は減る一方で、9年連続で減少しており、この春からの担任が未だ決まっていない学校もあるそうです。

先生不足は本当に深刻で、60歳定年退職後も貴重な戦力として期待せざるを得ないそうです。

なお、60歳以降の再任用に際しては、フルタイム勤務と短時間勤務があるそうですが、フルタイム勤務とはすなわち担任を持つことを意味します。新保先生と同世代で校長先生を降りた方が、また教壇に立っている方もいるそうです。

東京都では特に先生不足が深刻で、なんと、社会人で希望すれば、教員免許なしでも先生になれるそうです。ただし、教職に採用後2年以内に教員免許をとることが課せられています。こうした掟破りとも言えるようなことをしなければ、先生を確保できない厳しい実情がよくわかります。

今後、ますます先生不足と高齢化が進むだろう、とのことでした。

こうした現状を踏まえ、『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)(中教審第228号)』の中では、日本型学校教育を残しつつ変革を行っていくことが打ち出されました。その大きな柱が“働き方改革”と“GIGAスクール(1人1台端末及び高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備するとともに、並行してクラウド活用推進、ICT機器の整備調達体制の構築、利活用優良事例の普及、利活用のPDCAサイクル徹底等を進めることで、多様な子供たちを誰一人取り残すことのない、公正に個別最適化された学びを全国の学校現場で持続的に実現)※1”です。新保先生はこの“GIGAスクール”により、「ほっかいどう学」がさらに展開できることになると期待しているそうです。



図-2 講演の様子

(3)「ほっかいどう学」の目指すもの

新保先生が目指す「ほっかいどう学」の最終的なゴールは、「北海道の子供たちにもっと北海道を！」です。

新保先生は続けます。

「ほっかいどう学」では、開拓、アイヌ、縄文等、歴史のことを学ぶことも大事ですが、最も重要なことは北海道の未来を考えることなのです。

北海道のことは、子供たちだけでなく、実は大人、先生たちですらよく知りません。それは、そもそも教育されてこなかったこと、今までは知らなくてもよかったこと、困らなかったことなのです。

しかし、世界の資本は北海道が持つ潜在的な魅力を熱く見つめています。例をあげると、これほどのパウダースノーのスキー場が大都市近郊にある場所は世界のどこにもありません。また、この北海道を支えているのはインフラです。おいしい牛乳を飲むことをひとつとってもインフラが支えています。

しかし、その大事さが道民に、子供たちに、さらには教師に意外と知られていないし、理解されていません。日勝峠が北海道のどこあるのかさえ知らない札幌市の先生がいて驚いたこともあるそうです。

食料自給率 1,100%の十勝と言われますが、その十勝の土壌は先人達の努力による開拓でつくられたもの、もともとはほとんどが生産性の低い火山灰性土壌だったこともあまり知られていません。

お米の一大生産地の石狩平野は、かつて泥炭の土壌を改良してできたものです。新渡戸稲造は「農業における排水の発明は、工業における蒸気機関の発明」に匹敵すると言葉を残しているそうです。

こうしたことを北海道の子供たちに知ってほしいという思いが、「ほっかいどう学」を教える意欲につながっているそうです。

実は、昔の小学校は、北海道のことをたくさん教えていたそうです。

小学3年生では副読本「わたくしたちの札幌」、小学4年生では「わたくしたちの北海道」が用いられ、北海道のことを勉強していたそうです。

新保先生のお話を聞いて、私もなんとなくですが、その記憶の断片が蘇ってきました。たしかにそうした副読本があったように思います。

その中には、「(第三期)北海道総合開発計画」の説明があり、道民の未来のくらしがどう変わるか、まで書いてありました。例えば、下水道の整備は昭和43年20%→昭和55年80%、主な道路の除雪昭和43年42%→昭和55年100%・・・。「開発」と「成長」による未来のワクワク感を教える授業があったということです。

しかし、その副読本は昭和55年頃に廃刊となり、以後40年間は副読本がありません。

一方、道外では、「かがやく大愛知」、「あたらしい

きょうど岩手」等の都道府県独自の副読本があり、子供たちに自分たちの郷土を教えています。

北海道が、「開発」と「成長」を打ち出しにくい時代になったとはいえ、このままでいいのか。この魅力ある広大な大地で暮らす道民に、北海道のことをもっともっと学んでほしい、子供たちだけではなく先生たちにも・・・そのためにもオール北海道で取り組まなくてはならない。北海道の人口減少、社会資本への関心が低くなっている中にあるからこそ、あらためて「ほっかいどう学」をつくりあげて、道民の誇りを取り戻したい、という熱い思いをお話いただきました。

なお、「新たな北海道総合開発計画(第八期)」では、“本格的な人口減少時代にあっては、自ら考え地域づくりに取り組む地域の担い手を育成、確保することが重要であるとされ、地域に関する理解と愛着を深めるために「ほっかいどう学」を促進”することが盛り込まれております。

4. おわりに

新保先生の熱いお話は大変楽しく、目から鱗が落ちるお話ばかりで、大変感銘を受けました。

この困難な時代にあっても世界の中で輝き続ける北海道をつくる、そのための「ほっかいどう学」との思いは、まさしく当研究会の目指すところと同じと感じました。

当研究会の天沼代表(オンラインで参加)が最後に述べたように、当研究会としては、この「ほっかいどう学」を活動のバックボーンにしっかりと据えながら、私たち自身ももっともっと北海道を勉強して北海道の魅力を発信していきたいと思えます。

※1 GIGA スクール：文部科学省ホームページより
https://www.mext.go.jp/content/20191219-mxt_syoto01_000003363_11.pdf

奈良 照一 (なら しょういち)

技術士(建設/総合技術監理部門)

日本技術士会北海道本部
北海道スタンダード研究委員会
株式会社ドーコン
e-mail: sn961@docon.jp

